

語彙論のための用語

田 島 毓 堂

はじめに

一つのテーマを同じ土俵の上で議論するには、その用語はできるだけ統一されていることが、混乱を避けるために望ましいことはいうまでもなからう。ただ、かつて、水谷静夫1965が慎重に述べたように、決して思想の統一のためではない。そんなことをすれば、研究の進展を願ってすることが逆の効果をもたらしてしまう。いろいろな考えがあって、互いに切磋琢磨して進歩するものであると思う。

ただ、同じ内容を示すのにお互いに違う言葉を用いては議論も発展しにくいと思う。そのため、少なくとも自分が議論の中で用いている言葉について明確にしておこうというものである。私が今までに提案したり、議論した中からはっきりしておいた方が無用の誤解を避けられるのではないかと思うことを中心に述べる。

語彙論のためと銘打ったが、そこには、比較語彙論が想定されている。

語彙論に関する用語として次のようなものを取り上げる。

1. 語彙
2. 語彙元素論・語彙総体論・集団規範語彙（集団語彙・規範語彙）・個別語彙・語誌・語彙体系論・語彙史研究・比較語彙研究
3. 異なり語・延べ語・異なり語数・延べ語数・基本語彙・基幹語彙・基調語彙・基礎語彙・基礎語・簡易言語・基準語彙・使用語彙・理解語彙・C50・C50語彙・D10語彙
4. 意味構造分析法・拡大意味構造分析法
5. 意味単位・基準単位・分類単位・運用単位・名辞単位・複合語・調査単位・意味コード・語素コード

1. 語彙について

〔語彙〕一定の限定を伴った語の集合（「集まり」または「まとまり」）をいう。「語」「単語」とは異なる。語を定義することは難しいので、無定義術語として使用するが、語は語彙の元すなわち要素である。一語をさして「語彙」というのは、集合として元が1のものをさすことがありうるようにも考えられるが、語彙の本来にもとる。もともと「類を分かちて語を収めたもの」「一つのまとまりとして捉へて初めて『語彙』と呼ばれる」（水谷1965）。一語を語彙というのは、

誤りでなければ詭弁である。

これに関連して、「語彙数」「語彙集」「語彙の問題」「語彙の意味」「語彙の単位」などと用いられることが多いが、これらは恐らくは誤用である。

「語彙数」は、ある語彙の単位である「語」の数をさして使われていることが多いが、これは正しくない。正しくは「語数」である。この誤用は非常に多い。ただ、「語彙数」ということは語としてはありうる。たとえば、源氏物語の語彙、枕草子の語彙、…といくつかの語彙を指している場合である。

「語彙集」もほぼ同様、単に「語彙」といえばよいところである。決して、語彙を集めたものではなく、語を集めたもの、「単語集」または「単語表」を指して使っている。

「語彙の問題」は文法研究で頻出する。まさに「語に起因する問題」ということである。つぎの場合と似通う。

「語彙の意味」は「語の意味」のことである。「語彙の意味」など考えようもない。lexical meaning を直訳してこういうのであろうか。それならば、「辞書の意味」とありたいところだ。この用語は蔓延してどうにもしようがない状態だが、言葉を研究する一人一人が言葉の持つ意味に十分自覚的であるならば、今からでも避けられることである。皆が使っているからしかたない、というのでは少しも事情は改善しない。用語としてすでに定着していて今更何ともならないというのではいっこう事態は改善しない。誤りは誤りであり、改めるにしくはないのである。

語彙がこのように誤用される一因はもちろん語彙研究に帰せられる部分がある。それと同時に、「語」が一音節で不安定だということ、lexical・lexeme を「語彙的」「語彙素・語彙項目」などと用いたことにも関係あるかもしれない。ただ、後者はいつも「語彙素」「語彙項目」といえばよいが、略して「語彙」といえばたちまち誤解を生じる。これに対して、「単語」といえば大半は正しくなる。しかし、「単語」はなんとなく垢にまみれた感じが嫌われるのであろう、これを積極的に使う人もあるが、あまり好まれていないようである。しかし、語を語彙というよりはよほどよい。いくつかの要因はあろうが、根本は使用者の自覚であることは否定できない。

これに関連して「語彙的なるもの」などと使われるのも怪しげである。

2. 語彙論（語彙元素論・語彙総体論）に関して

語彙論が、その元（げん）である語の研究と、総体としての語彙の研究を包摂するものであることは、当然のことである。ただ、語彙論の発展の現状からみると、一方に「語」の研究の発達と、「語彙」の研究の未開とがある。単に「語彙論」といえば、「語」の研究だけを示すと思う人がいる一方で、「語彙論」は「語彙」の研究に限るべきだという意見もある。そういう、状況では、「語彙論」は両者を含むべきであるという建前だけではすまない。これを区別しなくてもよい状況になることを期待するが、さしあたり語彙論を「語彙元素論」と「語彙総体論」と一旦は分けておいた方が賢明であろう。そして、対象語彙としては、それによって言語活動が行われる

もとなる、いわば、その言語使用のノウハウ的なもの、「集団規範的な語彙」と、実際にその言語活動の結果として存在する「個別の実現としての語彙」がある。これを混同してはならない。

〔語彙元素論〕 これは「語」を対象とする領域をいう。「語」の意味・用法・歴史・使用範囲等あらゆる問題を扱う。こういう研究には「語誌」という用語が用意されているが、この語誌のほかに、語構成研究、語源研究も語彙元素論の守備範囲である。この成果は最終的に「辞書」に結集するであろう。語彙元素論について、集団的規範の問題として扱う場合と、個別の実現の問題として扱う場合とがある。もちろん、具体的研究対象はすべて個別の実現としての言語であるが、その個別の実現の研究に終始している限り、又、その対象自体の研究を目指す場合は「個別の実現」の研究である。例えば、語構成研究についていえば、個々の語についての研究の結果、語構成法として一般化出来ることがあれば、集団的規範の問題となる。その一般化しようとする姿勢が「集団的規範研究」につながる。語源研究や個々の語の意味の研究についても言語一般あるいは日本語一般の問題として扱い、そしてそのように扱える事柄が集団的規範としての研究になる。いわば、パロール的なものとラング的なものといえる。実際の言語行動における音声の研究と、それを一般化した音韻の研究においても同様な関係がみてとれる。文字の研究においても個々の字形の問題として扱う場合と、一般的字体の問題として考える場合とがほぼ同様の関係になる。

〔語彙総体論〕 総体としての語彙を対象とする分野である。語誌に比べて千年以上の開きがある。その研究の必要性に対する認識の欠如と、従って方法の欠如が進展を阻害していた。コンピュータはよき道具である。手段は整った。方法の開発と研究の意義の追究は急務である。体系論、分類・組織論、語彙史研究、比較語彙研究などはこの領域の研究テーマである。その基盤として、単位の設定、語彙調査、各種の基本語彙の選定が必要である。計量語彙論はその際の方法を提供するものである。これについても、個別の実現としての研究と、それを通じての集団的規範としての語彙の研究の面とがある。

〔集団規範語彙〕 いわばラング的なものをいう。実際にこれを示すことは出来ないが、各種の辞書は疑似的集団規範語彙である。実際にある個別語彙から抽象される。誤解のない限りは「集団語彙」とも「規範語彙」とも略していうこともある。集団規範語彙は不断に実際の言語活動を通じて更新される。決して確乎不動の物ではない。それゆえに言語は変化するのである。

〔個別語彙〕 個別の実現としての言語活動の結果を語彙として把握したものをいう。「テキスト語彙」というのもこれを指す。実際に存在するものである。各種文学作品や言語資料の語彙をいう。これを対象に語彙分析を進める場合は、使用率を問題とすることができる。いわば、パロール的なものである。

〔語誌〕 これは「語」の意味と用法と歴史と使用される分野地域など広く研究する分野をいう。古来からの個々の語の研究はそれぞれ語誌の一面を担ってきている。そして、その集大成としては「辞書」の形をとることになる。『言語学大辞典』においてこの研究が特に理論的には進めら

れていないように書かれているが、単なる誤解でなければ幸いである。それぞれがそれぞれのスタイルをもって行われていることは事実であるが、それぞれがある語について問題意識を持ち、その用例を搜索し、その意味と用法とについて記述するというのがその根本であり、そのことが、語誌の方法そのものである。それ以上の理論化は望蜀の歎である。個々の語の意味の記述は形式は整えられるであろうが、内容は個々別々である。

〔語彙体系論〕 音韻体系・文法体系といわれるのに対して、語彙にも体系があるべきであると考へて立てられるテーマである。多くの論議があり、確かにいろいろの言語において、部分的な体系らしきものが見られる。日本語では、親族名称・色の名・数・コソアド・擬声語擬態語には緊密な語の対応がみられる。しかし、体系と称する限りは、一部分の不明は残っても大多数の明確さが必要であろう。そして、それは決して、意味や概念の体系ではなく語彙の体系でなくてはならない。概念や意味の体系ならば、世界の言語はほぼ共通の体系を持つであろうが、語彙の体系は各言語特有であろう。何よりも、それは具体的な語形によるものでなければならない。意味分類の語彙表は意味体系によるものであり、語彙体系によるものでないことを銘記すべきである。

〔語彙史研究〕 従来、語の歴史を研究するもの、ある分野の語彙（例えば、親族・風の名・雪の名など）の歴史を研究するものが大半であった。語の研究はいくらそれを積み重ねても語彙史と全同とはならないであろう。体系が明らかになっていない語彙にあっては、語彙史の記述は困難な問題である。図式的に言えば、語彙史の記述は、体系の変遷の記述であるべきである。すなわち、その体系のどの部分がどう変わり、どの部分が変わらなかったか、そして、何故そのように変わり、何故変わらなかったかを記述することが、語彙史の記述であろう。もちろん、部分的な語彙の歴史の記述ということは当然あるべきことで、従来の語彙史研究で見べきところはそこにあったと思う。ただ、体系が判明せぬ以上語彙史の記述はできないかといえば、必ずしもそうではない。その方法と、対象を適切に限定して選ぶことにより十分可能である。比較語彙論の方法と対象がそれに貢献できる。

〔比較語彙研究〕 ここでいう「比較」については、少し断わりがあった方がよかろう。すなわち、この比較は「比較言語学」でいう同系言語の比較という狭いものではなく、あらゆる言語の比較研究をいう。従来「対照研究」という言い方があったがそれをも含めていう。単に用語の問題というだけでなく、「比較」などという一般語を特別の用法に閉じ込めておく理由が薄いと思うからである。そして、比較語彙研究では、その比較の際の観点として主として「意味」を中心に考えるので、何も同系に限る必要はないのである。

3. 研究対象としての語彙について

語彙研究の前提は語彙調査であろう。調査の際には必ず調査単位が問題になる。従来の語彙調査には何種類かの調査単位が設定されている。単に語彙調査に限らず、索引や語彙表を作るには必ずこの単位の事が問題である。このことは5において述べる。

何らかの調査単位に依って、実際に語彙調査を行って得られた結果は、語彙表として示される。五十音順の語彙表は、それ自体はある語の有無を知るための索引の用を果たす。それが最大の機能であり、それ以上でも以下でもない。このままでは、実際の語彙分析にはつながらない。

使用度数順(=使用率順)の語彙表には、使用数・使用率等が示される。異なり語数がどれだけ、延べ語数がどれだけということが、語彙量を示す用語として用いられる。単位語の総数が「延べ語数」であり、単位語のいちいちに「見出し語」を与え、異なる「見出し語」だけを集めたものを「異なり」(異なり語)といい、従来、この「異なり」のみが語彙分析に用いられることが多かったが、「異なり」と「延べ」とはその表す内容が同じではない。一方が、他方を代表することは出来ない。

〔異なり語と延べ語〕 この「異なり」と「延べ」という用語に関して、その定義自体は問題ないが、「異なり語」という言い方がある(阪倉1960)。本来の用語としては「異なり」と「延べ」として使われたのであるが、一般の言葉と紛らわしいことがある。特に、「異なり」が紛らわしい。「異なり」を問題としているとき、それがある語彙の中で互いに他と異なっているものとして扱っているのだということを示すために、単に「異なり」というのではなく、「異なり語」という言い方をした方が紛れないことがある。こういった意味で「異なり語」を使用する。「延べ」に関してはこういう欲求はあまり感じないが、対で考えるときにはやはり「延べ語」と使いたい。関連して、ある言語資料の「異なり」だけを示す語彙表を「異なり語表」という。

語彙調査の結果から、各種の基本語彙が選定される。ここで「基本語彙」と称しているものは、何らかの意味で基本になるような語彙というだけであり、これだけで何か特別のものを示すわけではない。事実、「基本語彙」という場合には、水谷静夫1959や林四郎1971のいうように「～のための」という限定の言葉がついて初めて意味をなすものである。そういう基本語彙の中には、基幹語彙・基調語彙・基礎語彙・基準語彙あるいは少し違うが基礎語(=簡易言語)といったものがある。このうち、最も深く語彙調査と関係するのが基幹語彙・基調語彙である。

〔基幹語彙〕 林四郎1971の造語である。ある言語集団の基幹部として存在する語彙である。その言語を使う際にはどうしても必要になる語彙、骨組みになる語彙である。これは、一つの言語を対象として考えることも、あるいは、一定の言語作品・言語資料を対象として考えることもできる。つまり、集団規範語彙としても個別語彙としても考えられる。林四郎1971の中で提示されたものは、各種の語彙調査による一種の近代日本語の基幹語彙であるが、同時に林氏はいくつかの個別の語彙調査においても「それぞれの資料内で基幹語彙を求める。」とも述べられる。例えば源氏物語の基幹語彙というものも考えられるのである。

〔基調語彙〕 特定作品の基調を作るのに働く語彙。いわゆるキーワード群である。寿岳章子1967が「テーマ語彙」と名付けたものである。これは、文学研究にとっても有用なものである。これも基本的には語彙調査に依って知られる。但し、基幹語彙が殆ど機械的に得られるのに対して、基調語彙は、どこでもいつでも使われるようなものを除く必要がある。そのためにはいくつ

もの語彙調査を対照してみる必要がある。

〔基礎語彙〕 それによって生活の大部分の必要をまかなうことのできる語彙で、その語を組み合わせることで必要な意味を表せるように選ばれた語、挨拶・対人関係に必要な語・生理上必要な語等よりなるもので、比較的借用語は少ないといわれる。方言調査などでも、これらが調査の対象になることが多い。いわば、「生活基礎語彙」というべきものを指す。林氏の上記論文の規定とは異なる。そこで林氏がいう基礎語彙は「基礎語(=簡易言語)」と呼ぼうと思う。林氏は「基礎語彙」を「基礎語」を指したり、ここでいう「基礎語彙」を指したりしている。

〔基礎語=簡易言語〕 それだけの語で何とか意志を通じることが出来るために選定された必要最低限の人工的語彙。C. K. Ogden の Basic English が1929年に初案が、1932年に850語からなる決定版が発表された。日本では英文学者土居光知氏が「基礎日本語」を、昭和8年に1000語の初案を、同18年に1100語にして発表した。土居氏の基礎日本語は知識体系の伝達が目的であって、文章に適用することを念頭に置き、会話は適用外であった。野元菊雄氏の提唱する「簡約日本語」は外国人の日本語習得を目的としたものであった。こういったものは、何はともあれ、少なくともそれだけで意志が通じあえるということを重視すれば語彙と文化の関係を探求する語彙研究に取っては重要な対象であろう。これだけで、一応完結していることも重要である。「基礎～千語」「基本～千語」という種々の辞書も似たところはあるが、この完結性という点では異なる。

〔基準語彙〕 標準的社會人としての生活に必要な語彙。小学生・中学生・高校生・大学生がいったいどのくらいの量の語彙を保有しているかという調査がある。個人差があるのは当然であるし、調査自体困難なものである。大体は、3万語から4万語が理解語彙の量とされる。使用語彙については調査が難しく、その例がないといわれる。林氏は国立国語研究所の雑誌九十種の用語調査の結果から、全体が約4万語、その内1万語で使用率としては90%を越えることから、このような数値が参考になるのではないかとされる。

なお、「使用語彙」と「理解語彙」という用語については、特に問題ないように思われる。すなわち「使用語彙」というのは、その人が話したり書いたりするときに使用することができる見出し語の集合である。理解語彙というものは、その人が聞いたり読んだりするときに理解することができる見出し語の集合である。一般に理解語彙の量は、使用語彙を部分として含み、一般に理解語彙の量は、使用語彙の量より大きい。」(『国語学大辞典』この項、樺島忠夫氏執筆) といって、大体はよいと思うのであるが、上記の記述に続いて「使用することができる語は、もちろん理解することができるが、理解できる語は必ずしも使用するとは限らないからである」という。この後半はともかく、「使用する語=理解できる語」ということは、理屈としては至極当然ながら、事実はそのでないこともあるように思う。量的には僅かなものではあるかも知れぬが、意味も知らずに、あるいは、間違っただけで使う(これはこれで一種の理解であろうが)こともある。理解語彙には、いくつかの段階を設ける必要があろう。意味も使い方も十分知っているものから、単に語形は知っているが意味も使い方も知らないものまで。時に、語形のみを知って使いたがる人もい

る。子供や学生に多い。

以上は、個別語彙の基幹語彙を除いては、規範語彙が対象となっている。そのほかに、使用率を選定の目度にしたC50とかD10という語彙を分析の対象としたことがある。

〔C50語彙〕 使用率順の語彙統計表において、上位からの累積使用率が50%を満たす度数階級までの語彙をさす。50%に特別の意味はないから、この数値は適宜変えればよい。50%としたのは、大きな語彙から、小さな語彙までを一緒に扱ったので、全部に適用できるギリギリの数字であった。ただ、「C50の数値」は50%をカバーするための語数を指し、これは同種の作品等の語彙においては大体定数的な存在であり、一種の文体指標的な性格を持つことが注目される。これは、上位語の使用率の安定性を示すもので、これはこれでC50語彙とは別に文体的な定数と見ることができるものである。

〔D10語彙〕 使用率順の語彙統計表で、上位からの累積異なり語数が10%に最も近いところの度数階級までの語彙を指す。C50の数値が語彙の規模に関わらずほぼ定数的であったのとは異なり、当然、ほぼそれぞれの語彙の異なり語数の10%近くなる。ただし、その使用率はそれぞれ相当の開きがある。規模が大きいくほど使用率は大きくなる傾向がある。これは、要するに上位語である。もちろん、上位語だけが全てではないが、この分析によってある程度の性質が分かるのである。これも、10%に特別の意味があるわけではないので、数値は適宜変えて考察すればよい。

対象語彙全体を通じて、個々の語の単位の問題がある。5に述べる。

4. 語彙分析法について

語彙の基本的性格として、意味的な性格と数量的な性格がある。語彙を明らかにするにはその両者を満足させる分析法が必要である。従って、例えば、使用率とか品詞別の構成比とか、語構成別の語彙の構造とか、語種別の語彙構造といった観点、あるいは、語彙間の共通語彙の比率といった観点などからは、語彙の一般的性質以上のことは判明しない。意味の面から考える場合、数量的扱いとマッチしなければならない。いわば、意味の数量化を図らねばならないが、意味は数量化からは最も遠い存在である。この点を克服したのが、阪倉篤義1960が始めた「意味構造分析法」である。

〔意味構造分析法〕 もっとも、阪倉氏はこれをこのようには呼んでいない。私の命名である。「意味によって語彙の構造を分析する方法」である。カテゴリー化した意味に番号(コード)を与え、それに語を当てはめてその番号を付け、そのコードごとに集計して、ある語彙を構成する語が、いかなる意味分野の語がどの程度の割合であるかをみる分析法である。このためには、一つ一つの語に意味コード付けることが必須である。『分類語彙表』がそのための基準として現在最も適当である。なお、これによる場合、特に複合語の扱いが問題になる。つまり、『分類語彙表』では基本的に1語には一つのコードがつく。複合語も同じである。そうすると、複合語の構成要素に必然的に無視される部分が生じる。「意味」を分析の観点とする分析にとって、無視さ

れる部分があることは致命的であるかも知れない。そのために、コードを与える単位を、普通の語の単位とせず、「意味単位」とする必要がある。

また、日本語のみならず、他の言語をも対象とする比較語彙研究にとっては、『分類語彙表』で取り上げられていない文法的機能語にもコードを与える必要がある。そのため、すでに、意味を度外視したそういう文法質までも対象としたものを「意味コード」「意味構造分析法」なる名称で呼ぶことは適当でないので、「語素コード」「拡大意味構造分析法」と称する。「語素コード」については別に述べるとして、「拡大意味構造分析法」について一言する。

〔拡大意味構造分析法〕 従来の意味構造分析の範囲を越えたものであるので「拡大」といい、同時に、同一線上にあるものとしてこの意味構造分析法という用語によることとするものである。

5. 語の単位とコード付けについて

意味構造分析のためには各語にコードを付ける必要がある。過不足なく付けることが肝要である。他言語を視野にいれた比較語彙研究にとっては、それぞれの言語に特有な要素にも適切なコードを与え、あとう限り存在するものを無視しないことが大切である。

複合語の要素の意味を無視しないために、複合語を要素毎に分割し、それぞれを「意味単位」と称し、それぞれに意味コードを与える。一方、調査単位は、種々の単位が考えられる。国立国語研究所の語彙調査でもいろいろな調査単位での調査が試みられているが、最もコンセンサスの得やすいと思われる文節に基礎をおき、それを自立語と付属語とに分けたものを用いようと思う。そして、その調査単位は集計単位として「基準単位」と名付ける（以前、田島毓堂1992aで語彙研究の最終的な結果として「意味分類語彙表」を想定し、「分類単位」と称したものと同じ）。意味単位に分割するのは、実際に存在する部分が無視しないためである。ただし、こうすると、その複合語がよってきたところを示すものとはなるが、もともと複合語は単純語の寄せ集め以上のものであるから、個々の要素にコードを与えればその集計はもともとの複合語とは違う場合が当然ある。むしろあって当然である。そうすると、語彙の如実な姿が分からなくなる。それを一つのコードで解決するのは難しい。要素毎に与える意味コードと、一語に全体としての「単語コード」を与えることによってそれを解決しようと思う。依然として、全体に1コードを与えるのは難しいが、一方に、意味単位ごとのコードが与えてある安心感からよほど容易にはなるであろうと思う。

このほかに、単位の名称として、「運用単位」がある。

〔運用単位〕 一定の個別語彙には、それ特有な単位がある。これは、基準単位の中に包摂されるべきものである。索引の見出し語などにも採用されるべきものである。その限りでは特に問題とすべきことはないが、これは必ずしも辞書の見出し語などにはならないかもしれないものである。「臨時一語」と似たところはあるが、それよりも、ある語彙に特有な単位として位置づけるべきものである。

〔名辞単位〕 いわば物の名の単位である。物の名は必ずしも単語の範囲と同一ではない。「竜宮の乙姫の元結いの切りはずし」は藻の一種の名前であるが、これは、ひとつの物の名ではあっても決して一語ではない。会議体の名、法律の名、学校の名、人の名など一つの物事についてのもは、物事の名であり、それはそれで時に有用であり、そういうものを扱う用語事典の類では見出し語にもなるが、語彙論の単位にはなりにくい。しかし、そういう語の単位もある。

〔複合語〕 この用語の使い方には二種類ある。複合語は単純語（その語構成要素が単一の語）と対するが、複合語の中を①合成語と②派生語に分ける使い方と、合成語を上位概念としてその中を、①複合語と②派生語に分ける考え方とである。

つまり

a) 単純語

複合語（①合成語 ②派生語）

とするのと、

b) 単純語

合成語（①複合語 ②派生語）

とする両者である。私はa)に従う。単純でないのは複合であって、合成は複合の中の一つであると考えからである。

〔調査単位〕 ごく普通に「語」（単語）と思われる単位を採用する。まことにあやふやな感じを持つが、現代語の発音に基づくもので、もっともコンセンサスの得易いものである。文節を基本として分割し、その中を自立語と付属語に分けていくのである。これは割合誤りがなくすむ方法である。もちろん若干の例外は含む。特に助詞「と」や助動詞「だ」などは、発音を基礎とした分割には馴染まないところもあるが、大方は文節に分割し、その中を自立語・付属語に分けることにより調査単位は得られる。複合語は当然一調査単位となる。一調査単位の中が複数の意味単位から成っていればそれを意味単位ごとに分割し、それにコードを与えるのである。但し、漢語に関しては、文節が必ずしも十分に機能せず、種々の問題が未解決の問題として残っている。

〔語素コード〕 意味コードの延長線上にあるものである。すなわち、従来意味コードと称していたものは総てこの語素コードに移行する。さらに、文法質にまでコードを拡大したものである。語素コードを与える単位は、語源研究が十分でない現在では、常識的な語源単位を基礎とすること、つまり、現代人にとって、僅かな説明で了解されるようなものを基礎とし、大がかりな説明を要しないものをコード付けの基礎とする。将来語源研究が大いに進歩した後には、自ずからそれが基礎になるであろう。ただ、現在でも語源の明確なものや、少々手続きを経れば多くの賛同を得るもの、まだ、十分理解は得られないがそう考えられる蓋然性の大きいもの、もっとあやふやなものまで、種々の段階があり、レベルを区切る必要がある。

なお「意味コード」を「語素コード」と称し変えることにともない、「意味単位」と称してい

たのも「語素単位」と称し変えるのが適当であろう。語素コードは、具体的には、『分類語彙表』の部門別コードが、

1. 体の類 2. 用の類 3. 相の類 4. その他 とした上で、小数点以下を、
 - . 1 抽象的關係
 - . 2 人間活動の主体
 - . 3 人間活動
 - . 4 生産物及び道具
 - . 5 自然及び自然物
 とあるに対して、新設のコードは以下の通りである。

- | | | |
|-----------------|----------------------|----------|
| 5. 接頭辞 | 8. 004 接続助詞 | 15. 固有名詞 |
| 5. 001 名詞化接頭辞 | 8. 005 終助詞・間投助詞 | 16. 記号 |
| 5. 002 動詞化接頭辞 | 8. 006 準体助詞 | |
| 5. 003 形容詞化接頭辞 | 8. 007 副助詞 | |
| 5. 004 形容動詞化接頭辞 | (8. 008 その他) | |
| 5. 005 副詞化接頭辞 | 9. 助動詞 | |
| (5. 006 その他) | 9. 001 第四類 | |
| 6. 接中辞 | 9. 002 第三類 | |
| 6. 001 名詞化接中辞 | 9. 003 第二類 | |
| 6. 002 動詞化接中辞 | 9. 004 第一類 | |
| 6. 003 形容詞化接中辞 | 9. 005 別類 | |
| 6. 004 形容動詞化接中辞 | (9. 006 その他) | |
| 6. 005 副詞化接中辞 | 10. 補助動詞・補助形容詞 | |
| (6. 006 その他) | 11. 関係詞 | |
| 7. 接尾辞 | 12. 語尾 | |
| 7. 001 名詞化接尾辞 | 12. 001 格語尾 | |
| 7. 002 動詞化接尾辞 | 12. 002 人称語尾 | |
| 7. 003 形容詞化接尾辞 | 12. 003 性数語尾 | |
| 7. 004 形容動詞化接尾辞 | 12. 004 時制語尾 | |
| 7. 005 副詞化接尾辞 | 12. 005 先語末語尾 | |
| (7. 006 その他) | 12. 006 終結語尾 | |
| 8. 助詞・助辞 | 12. 007 連結語尾 | |
| 8. 001 格助詞 | 12. 008 転成語尾(冠形詞・名詞) | |
| 8. 002 並列助詞 | 13. 前置詞・介詞 | |
| 8. 003 係助詞 | 14. 意味不明 | |

ここで、これらについては小数部分を〔.6〕でなく〔.0(文法的機能)〕とした。意味の続きのようになるのをさけるためである。ただ、これらに含まれるものには、意味を担っているものもいくらか見受けられるので、その場合は、以上の整数部分に『分類語彙表』のコードの小数点以下の部分のみを付けることとする。整数部分は文法的機能の違いを示すものとする。たとえば、「御」は敬語の意味をもつ接頭辞として〔5.359〕とする。整数部分は「接頭辞」であることを示し、〔.359〕は敬意につけたコードである。「れる・られる」は〔9.111〕とする。整数部分は「助動詞」であることを示し、〔.111〕は『分類語彙表』のコードの〔2.111〕の小数点以下の部分である。

なお、これは一応の試案であり、さらに拡大新設が可能である。

以上、特に順序建てもなく記した。ほとんどがすでにいずれかにおいて述べたものを一つに纏めたものである。

〔文献〕(以上に取り扱った分野の文献を中心に掲げる。以後さらに増補の予定である)

浅見 徹1971「古代の語彙Ⅱ」(『国語史3 語彙史』1971)

石井正彦1996「使用頻度“1”の語と文章——高校『物理』教科書を例に——」(『国立国語研究所研究報告集17』1996)

泉井久之助1935「語彙の研究」(『国語科学講座』1935)

大野 晋1955「万葉時代の音韻」(『万葉集大成6 言語編』1955)

国立国語研究所1952『語彙調査』国立国語研究所資料集2(1952)

国立国語研究所1953『婦人雑誌の用語』国立国語研究所報告4(1953)

国立国語研究所1957・1958『総合雑誌の用語』国立国語研究所報告12、13(1957)

国立国語研究所1959『明治初期の新聞の用語』国立国語研究所報告15(1959)

国立国語研究所1962・1963・1964『現代雑誌九十種の用語用字』国立国語研究所報告21・22・23(1962・63・64)

国立国語研究所1964『分類語彙表』国立国語研究所資料集6(1964)

国立国語研究所1970~73『電子計算機による新聞の語彙調査(I~IV)』国立国語研究所報告37・38・42・48(1970~73)

国立国語研究所1970~79『電子計算機による国語研究(I~X)』国立国語研究所報告31・34・39・46・49・51・54・59・61・67(1970~79)

国立国語研究所1983・1984『高校教科書の語彙調査』国立国語研究所報告76・81(1983・84)

阪倉篤義1960「萬葉語彙の構造——(その一)名詞について——」(『万葉』34 1960)

柴田 武『語彙論の方法』1988

柴田 武「現代語の語彙体系」(『講座日本語と日本語教育』6 1989)

寿岳章子1967「源氏物語基礎語彙の構成」(『計量国語学』41 1967)

ジョジョック・スパルジョ1997「日本語・インドネシア語の比較語彙研究——日・イの基幹語彙的なものを使つての試み——」(『比較語彙研究の試み』開発・文化叢書21 名古屋大学大学院国際開発研究

- 科 1997)
- 田島毓堂1992 a 「語彙論的語の単位試論——意味単位と分類単位——」(『日本語論究 2 古典日本語と辞書』1992)
- 田島毓堂1992 b 「語彙指標——語彙の数量的側面と語彙研究への視点——」(『日本語研究と日本語教育』1992)
- 田島毓堂1992 c 「語彙論的語の単位——意味単位と分類単位と——」(『文化言語学その提言と建設』1992)
- 田島毓堂1992 d 「語彙論の課題——集团的規範と個別的実現——」(『名古屋大学国語国文学』71 1992)
- 田島毓堂1993 a 「語彙分類の考え方」(『日本語学』12-5 1993)
- 田島毓堂1993 b 「古典作品の特徴語分析のための一試論」(『日本語学』12-11、12 1993)
- 田島毓堂1994 a 「異文化、その比較と理解の方法——語彙分類を通じての原理的考察——」(『国際開発研究フォーラム』1 1994)
- 田島毓堂1994 b 「訓読法華経と仮名書き法華経と——法華経和訳の経緯を概観し、語彙史の方法を提案し、仮名書き法華経としての倣成本仮名書き法華経を為字訓よりみる——」(『開発における文化(2)』(開発・文化叢書5 名古屋大学大学院国際開発研究科 1994)
- 田島毓堂1995 a 「比較語彙論の構想——異文化比較研究のために——」(『国際開発研究フォーラム』2 1995)
- 田島毓堂1995 b 「意味コードの付け方——語彙比較研究のために——」(開発・文化叢書12 名古屋大学大学院国際開発研究科 1995)
- 田島毓堂1995 c 「語彙研究とコンピュータ」(『名古屋大学国語国文学』77 1995)
- 田島毓堂1996 a 「意味コード付けに関する諸問題」(開発・文化叢書14 名古屋大学大学院国際開発研究科 1996)
- 田島毓堂1996 b 「三たび語の単位について——「運用単位」の提案——」(『言語学林1995-1996』1996)
- 田島毓堂1997 「比較語彙論のために——調査単位とコード付け——」(『開発・文化叢書21 比較語彙研究の試み』名古屋大学大学院国際開発研究科 1997)
- 田島毓堂・広瀬英史1997 「語素コードに関する提案——比較語彙論のために(その2)——」(『語彙研究の可能性』語彙研究法報告2 名古屋大学大学院文学研究科 1997)
- 田中章夫1970 「自動抄録処理におけるキーワードの性格」(『電子計算機による国語研究』)
- 田中章夫1978 『国語語彙論』昭和53
- 土居光知1933 『基礎日本語』(六星館 1933)
- 土居光知「基礎日本語」(『国語文化講座』1 1941)
- 西尾寅弥1964 「単語認定の基準」(『講座現代語6 口語文法の問題点』1964)
- 野元菊雄1994 『簡約日本語の創成と教材開発に関する研究』(国立国語研究所 1994)
- 林 四郎1971 「語彙調査と基本語彙」(『電子計算機による国語研究Ⅲ』国立国語研究所報告39 1971)
- 林 四郎1982 「基本語彙—その構造観」(『講座日本語の語彙』1 1982)
- 林 四郎1984 「私の基本語彙論」(『日本語学』3-2 1984)
- 林 四郎1985 「臨時一語の構造」(『国語学』131 1985)
- 広瀬英史1996 「源氏物語の語彙史的研究——源氏物語の原文と現代語訳を比較する——資料編」(1996年修士論文 名古屋大学大学院文学研究科)
- 広瀬英史1997 「比較語彙研究を対象とした語素コードの提案——『分類語彙表』コードと語素コードの比較——」(第5回国立国語研究所国際シンポジウム「言語研究とソーラス」1997)
- 前田富禎1974 「語彙の体系について」(『東北大学教養部紀要』19 1974)
- 前田富禎1975 「語彙に体系はあるか」(『新日本語講座』1 1975)

- 前田富祺1988「計量語彙論と国語語彙史研究」(『待兼山論叢』22 1988)
- 前田富祺1989「語彙総論」(『講座日本語と日本教育』6 1989)
- 水谷静夫1959「基本語彙と語彙調査」(『国語教育のための国語講座』4 1959)
- 水谷静夫1965「語彙論の術語をめぐって」(『国語学』62 1965)
- 宮島達夫1977「語彙の体系」(『岩波講座日本語』9 1977)
- 宮島達夫1973「無意味形態素」(『国立国語研究所論集4 ことばの研究4』1973 『語構成』ひつじ書房
1997に再録)
- 森岡健二1960「語彙体系と語彙史」(『国語と国文学』37-10 昭和35)
- 森岡健二1982「語彙の歴史の中の現代語彙」(『講座日本語学』4)